ISSN: 2189-793X

Amami Station, International Center for Island Studies, Kagoshima University

とうしょけんぶんしつ

島嶼研分室だより

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 13
2021 年 9 月

企画紹介・・・

Web オンラインシンポジウム
「コロナ禍の奄美群島で教育研究をどのように進めたか・進めるか」

鈴木英治（すずきえいじ）
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

2020 年度から 2021 年度の 2 年間で文科省特別経費により「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローカル教育研究拠点形成」プログラムを進めているが、2021 年 3 月 6 日（土）に初年度の活動をまとめるシンポジウムを行った。ただしコロナの影響があるので、会場は設定せず、Zoom を使ったオンラインシンポジウムとなった。コロナの流行により翻弄された 1 年であったが、その中でできる範囲の活動をどのように進めてきたかを、9 名の講演者に語ってもらい、約 70 名の方が Web を通して参加した。

まず研究・国際担当の馬場昌範理事のあいさつで始まり、奄美が国立公園になる時に県や国が買い上げた地域を中心に開始した自然環境モニタリング活動について、農学部の鵜川 信先生が現在の進行状況を説明した。2 番目にアマミノクロウサギの個体数回復に伴い問題になりつつあるウサギによる柑橘類への食害を防ぐ対策に取り組んでいる農学部の髙山耕二先生が、侵入防止対策について解説した。3 番目に理工学研究科の上野大輔先生が、普段目にしないが、海や川に生きている生物の中に育まれる寄生生物たちが多様性に富んでいることを説明した。4 番目は法文学部の兼城糸絵先生が、学生たちと奄美に行き地域の古老などから、第二次世界大戦の頃に奄美がどのような状況であったかを聞き取っている活動の紹介をした。5 番目は奄美分室が中心となって 1 年間進めてきた「奄美群島島めぐり講演会」について、コロナ禍に対応して毎回様々な変更をしながら進めてきた状況を宋 多情先生が説明した。

一旦休憩後に、法文学部が学生を中心として進めてきた活動の紹介に入った。6 番目の中吉真仁さんは沖永良部島で地域の人と協力して進めている産業活性化活動について説明した。7 番の永田大武さんは奄美の地域メディアを訪問して調査した結果を報告した。8 番目に法文学部の小栗有子先生が、法文学部はどのようにしたら奄美の人たちに貢献できるかを考察した。最後に島嶼研の河合 渓先生が今後の研究方針について説明した。これらの講演を基礎として鈴木の司会のもとに討議に入り、Web を通して議論を進めた。最後に松田忠大法文学部長が総括をして 3 時間半のシンポジウムを終了した。

Web オンラインシンポジウムの様子
（2021 年 3 月 6 日）

令和２年度島嶼研シンポジウム
「奄美大島の内湾―濁りに隠れた多様な生き物たちの楽園―」を終えて

上野（うえの） 大輔（だいすけ）
（鹿児島大学大学院理工学研究科）

奄美群島の海に暮らす生物たちには、極めて魅力的な顔ぶれが揃う。奄美の自然への注目が世界的に高まりつつある今、奄美の海と生き物たちの素晴らしさについて見つめ直したい。そうした構想から、今回のシンポジウム実現へと繋がった。

本シンポジウムは、Zoom でのオンラインと鹿児島大学国際島嶼教育研究センター（島嶼研）における対面方式で開催され、奄美大島を取り巻く海洋の中でも頻繁に取り上げられるサンゴ礁の海に対し、見過ごされがちな内湾環境とそこに暮らす生物にスポットを当てた。演者には、奄美・沖縄でのフィールド研究を最前線で精力的に行っている３名をお招きした。第一演者は、京都大学の後藤龍太郎博士である。後藤氏には、奄美の干潟に暮らす様々な生物と、それらに共生する小さな二枚貝の巧みな生活様式、そしてその研究過程についてご紹介いただいた。内容の興味深さもさることながら、後藤氏の洞察力の高さ、知識の豊富さ、考察の鋭さに強く感銘を受けた。第２演者は、本シンポジウムの真の主催者でもある鹿児島大学（現所属：いおワールドかごしま水族館）の藤井琢磨博士である。藤井氏は島嶼研の奄美分室に常駐し、6 年間にわたって内湾環境特有の生物研究に力を注いできた。今回は、干潟よりもや深い水深帯の生物の暮らしについてご紹介いただいたが、藤井氏の生物への愛情と情熱が見て取れる内容であり、おそらく一般には認知されていないレアな話題ばかりである。最後の演者は、琉球大学の James Davis Reimer 博士である。Reimer 博士は、サンゴ礁生物を専門に研究を進めている。講演では、指導学生の山極広孝さんと共同で、沖縄島中部にある中城湾 45 年間の変遷を追った内容を紹介していただいた。特に興味深かったのは、Reef compression という現象で、奄美でも同様の事が起こっている可能性があるそうだ。今後、保全を考える上では外せない要素となるだろう。

このように、シンポジウムでは三者三様の貴重なお話を伺うことができた。いずれの話題も新鮮味に満ち躍動感溢れる内容であり、奄美の自然の素晴らしさについて巷とは一味違う話が聞ける、またとない機会になった。参加者も生物に携わる方が多く、専門的な質問への回答にはやはり専門的な知識を要するものが多く、奄美の内湾にのみ焦点を当てたのにも関わらず議論は尽きなかった。他の環境については勿論の事、内湾環境についてもより掘り下げることで、次回のシンポジウムを計画する意義は大きいであろう。

フィールドに立つ演者たち。左から後藤龍太郎博士（京都大学）、藤井琢磨博士（鹿児島大学）、James Davis Reimer 博士（琉球大学）。

薩南諸島における研究の紹介

植物の多様性はどのような仕組みで維持されているのだろうか？

渡部（わたなべ） 俊太郎（しゅんたろう）（鹿児島大学理学部生物学プログラム）

2021 年 7 月、奄美大島は世界自然遺産への登録が正式に決定した。「生物多様性をどのように維持していくのか」という課題は、日本全体にとってますます重要になる課題になるだろう。私が専門にしている生態学は生物多様性の維持・創出機構を基礎科学の観点から解明することを目指す学問分野である。生態学の研究を通じて薩南諸島の生物多様性の維持に少しでも貢献できればと考えている。

奄美大島で私が気になっているテーマの一つは外来植物の侵入である。外来種が生態系に及ぼす大きな影響の一つに在来種の駆逐がある。例えば奄美大島ではタチアワユキセンダングサというキク科の外来種が島中に生育しているが、在来の近縁種であるタウコギやセンダングサは、それまでごくありふれた雑草であったにもかかわらず大きく数を減らしている。

一方、奄美大島の森林を調査するとこうした外来種の定着は森林ではほとんど起こっていないことに気づく。奄美大島の森林はその多くが過去に伐採を受けた二次林であり、外来種が侵入する機会はそれなりにあったと推測されるが、なぜ森林では外来種の定着や在来種の駆逐が起こりにくいのだろうか。私は現在、樹木の見せる開花結実の年変動と多回繁殖が近縁外来種の定着を抑制するのではないかと考え、この疑問の解明を目指している。

奄美大島の森林の様子

南西諸島の海洋生物多様性－ウミエラ類研究を例として－

櫛田（くしだ） 優花（ゆか）（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室）

南西諸島に位置する奄美・沖縄の 4 地域が世界自然遺産として登録されることが決定した。これらの地域は、生物多様性ホットスポットである日本の中でも生物多様性保全上重要であり、様々な固有種が存在することが知られている。メディアでは、アマミノクロウサギ、ヤンバルクイナ、イリオモテヤマネコ等の陸上動物がよく脚光を浴びており、世界自然遺産登録決定をきっかけに奄美・沖縄の自然の豊かさを誇りに思った方も多いのではないだろうか。

このような中で、陸域生物と比較すると海洋生物の多様性に焦点が当たる機会は少ない。それにも関わらず、南西諸島の海洋生物多様性は、世界レベルでも極めて高いことが知られている。理由としては黒潮という暖流の存在があげられる。黒潮は世界で最も海洋生物多様性が高い Coral triangle 方面から流れてくる。亜熱帯の南西諸島海域では、美しく豊かなサンゴ礁が形成され、そこには多様な海洋生物が暮らしている。これらの環境や水産種は、古くから人の暮らしと関わりを持ってきた。

さて、私の研究対象であるウミエラ類（刺胞動物門八放サンゴ亜綱）は、海洋生物の中でも、話題となる機会がさらに乏しい動物だが、世界中の浅海から深海の砂泥底に広く生息する。砂泥環境には一見すると、そこに生物がいないように見えるかもしれない。しかし、実際にはウミエラ類のような砂泥底に適応した多様かつユニークな海洋生物が生息する。近年、南西諸島からは、砂泥環境に生息する海洋生物が新種として、しばしば報告されている。今後、奄美群島をはじめとする海域で砂泥環境の生態系を支えるウミエラ類相を明らかにし、奄美群島における海洋生物多様性の解明に貢献したい。

砂泥環境に適応したウミエラ類

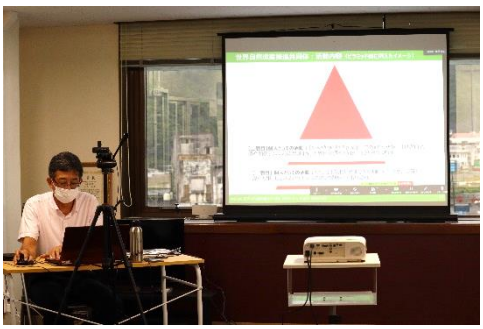
奄美分室の活動報告（2021年３月～2021年８月）

＜セミナー・観察会等＞

◎第 30 回奄美分室で語りましょう「環境保全と地域振興策の両立を目指して～世界自然遺産推進共同体の活動について～」

日時：2021 年 5 月 28 日（金）、鹿児島大学島奄美分室にてオンライン中継会
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室
講師：栄 正行（世界自然遺産推進共同体事務局、日本航空㈱奄美営業所）

1 年 3 か月ぶりの開催となる「奄美分室で語りましょう」では、世界自然遺産共同推進体・日本航空㈱奄美営業所の栄氏によって、世界自然遺産推進共同推進体について紹介が行われた。本講演では主に共同体発足背景や活動内容等が紹介された。新型コロナウイルス感染状況の拡大の影響によりオンラインでのセミナーとなったが、質問や報告者との活発な議論も行われ盛況であった。



世界自然遺産推進共同体の活動について紹介をする栄氏

◎第 31 回奄美分室で語りましょう「パッションフルーツの施肥管理・土壌管理」

日時：2021 年 6 月 22 日（火）、鹿児島大学島嶼研奄美分室にて（兼オンライン中継会）
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室
講師：近藤友大（京都大学大学院農学研究科、国際島嶼教育研究センター令和 3 年度客員研究員）

京都大学大学院・鹿児島大学島嶼研令和 3 年度客員研究員の近藤氏によって、「パッションフルーツの栽培管理」についての講演が行われた。会場には、パッションフルーツ収穫の季節が近いこともあり、定員を超える会場での参加申し込みがあり、会場では 12 人、Zoom オンライン式では 10 人が参加した。会場・オンラインともに質疑応答が活発に行われるなど盛況であった。

パッションフルーツに関する研究成果を紹介する近藤氏

◎奄美の植物観察会

日時：2021 年 8 月 15 日（日）、フナンギョ滝方面の林道
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：鈴木英治（国際島嶼教育研究センター）

鹿児島大学島嶼研の鈴木特任教授を講師として、住用町で奄美の植物観察会が開催された。2 週間のみの短い広報期間であったが、定員 15 名を満たす盛況の観察会となった。参加者とともに実際に林道を歩き、植物を観察しながら解説が行われた。

林道を歩く一行

奄美の植物について解説する鈴木特任教授

◎奄美分室でオンライン中継された講演会

- 2021/3/6 鹿児島大学「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローカル教育研究拠点形成」プログラム・公開 Web シンポジウム
  「コロナ禍の奄美群島で教育研究をどのように進めたか進めるか」
- 2021/3/13 島嶼研シンポジウム(オンライン)
  「奄美大島の内湾—濁りに隠れた多様な生き物たちの楽園—」
- 2021/4/19、5/17、6/28、7/12 第 209～212 回 国際島嶼教育研究センター研究会

＜奄美分室来訪者数＞

のべ 221 名（2021 年 3 月 1 日～2021 年 8 月 31 日）

世界自然遺産登録決定！！

世界自然遺産登録後の変化と住民に求められること

宋（そん） 多情（だじょん）（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室）

2021 年 7 月 26 日、「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」が世界自然遺産になった。登録から約 2 ヶ月、島に生活する皆さんは世界自然遺産になったことに何か実感はあっただろうか？遺産登録後には観光客が一気に増える傾向があり、観光地でトラブルが生じたり、地域住民が不便を感じたりする場合もある。現在は新型コロナウイルス感染症の影響で島に訪れる観光客は少ないが、この先を考えると事前に対策を考える必要がある。例えば奄美大島で近年人気であるナイトツアーの場合、アマミノクロウサギへの関心が高まり、住用町に位置する市道三太郎線の利用が増えている。そこで、ロードキルの問題や利用者間のトラブルなどを防ぐために、2021 年 10 月から事前予約制や台数制限などの利用ルールが試行されることになった。少し不便になるが、長期的に見ると一定の規制は必要である。このような変化をはじめ、奄美の自然に対してさらに関心を持つことが、これからの奄美の人々に求められているものだと思う。

2021年度 鹿児島大学 奄美群島島めぐり講演会開催のお知らせ

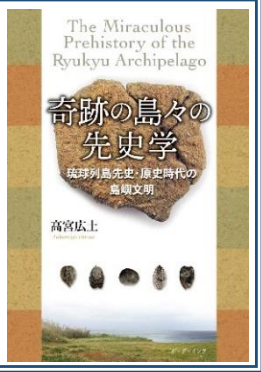
鹿児島大学国際島嶼教育研究センターでは、奄美群島の生物多様性や自然と人との関わりについて焦点を当てた研究を行い、教育に生かすプロジェクトを進めております。その一環として、本センターでは奄美群島の各島を巡りながら、研究成果を島のみなさまに還元することを目的とした「鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会」を対面式および Zoom によるオンライン式にて開催しております。尚、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、やむをえず対面式での講演が中止となりオンライン式のみの開催となることもございますが、ご了承ください。

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター・文部科学省特別経費プロジェクト
　　「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローカル教育研究拠点形成」
共催：奄美群島広域事務組合
後援：奄美市、与論町、大和村、喜界町、和泊町、伊仙町

【開催日】
第 13 回　2021 年 9 月 4 日（土）　奄美大島　住用町（※Zoom 開催のみ）
第 14 回　2021 年 9 月 25 日（土）　与論島（※Zoom 開催のみ）
第 15 回　2021 年 10 月 9 日（土）　奄美大島　大和村（※Zoom 開催のみ）
第 16 回　2021 年 11 月 20 日（土）　喜界島（喜界町役場　多目的室）
第 17 回　2021 年 12 月 4 日（土）　沖永良部島　和泊町（和泊町役場 1 階　結いホール）
第 18 回　2021 年 12 月 18 日（土）　徳之島　伊仙町（伊仙町中央公民館）
※要事前登録（各回開催日 1 週間前まで）。字が灰色ものは実施済み。

問い合わせ先：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室
〈電話〉0997-69-4852　〈メール〉amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp
Google フォームで申し込み：https://forms.gle/qo1yDeETmv2XmgZZ6　Google フォームのＱＲコード

奇跡の島々の先史学　高宮広土著



高宮広土副センター長が執筆された「奇跡の島々の先史学」が 2021 年 4 月にボーダーインク社から出版されました。本書には、世界的にみても珍しい先史学的特徴をもつ、奄美・沖縄の“奇跡”の島嶼文明が紹介されています。本書は、出版元のボーダーインク社またはネットでもお買い求めいただけます。（2200 円+税）

～学生島体験！vol.13～
「初心忘るべからず」

蜂須賀（はちすか） 莉子（りこ）　（鹿児島大学農林水産学研究科修士 1 年）

今年の 2 月、私は初めて奄美大島に上陸した。初めての奄美大島では、私は 5 日間に渡る野外調査に参加し、奄美の森をひたすら駆け回った。この調査は、奄美の森林が持つ生物多様性を総合的に評価するためのモニタリング（長期観測）システムを構築するためのものである。私たちは森林内に 20m×20m のプロットを作り、その中にある樹木の太さや高さを測定する「毎木調査」を行う。私はこの毎木調査がなぜかとても好きだ。調査地点のプロットに向かう道のりは冒険のようで、私たちは山登り、時には沢下りをしながら道なき道を歩いていく。この時間は調査の中で最も楽しく、先生方に生物の名前や特徴を教えてもらいながら知らない植物や動物を観察する。2 月、6 月、7 月と、これまで私たちはさまざまな地点で調査を行ったが、各プロットで地形や林齢が変化するごとに樹木の本数や太さの変化が目に見えてわかるのでとても面白い。野外調査を終えると、次はデータ入力という名の修業が始まる。研究室のメンバーと膨大なデータを整理するのは大変だが、打ち込んだデータを見るとプロットごとの樹種の変化が分かる。さらに、電子データを見るとデータの集まりに達成感を感じ、また次も行きたいと思える。この繰り返しが楽しく、次の奄美調査が待ち遠しい。モニタリングシステム構築のプロジェクトは長い年月をかける調査だが、これからもこの初心の感覚を忘れずにいたいと思う。

プロット内からパシャリ

編集後記

4 月から島嶼研奄美分室に赴任いたしました櫛田優花です。海洋無脊椎動物のウミエラ類について研究を行っています。
奄美には、豊かな自然とおいしい食べ物がたくさんあって幸せを感じます。これからどうぞよろしくお願いします。

櫛田優花

奄美大島での生活も今月で 3 年目に入ります。あっという間に時間が経ちました。引き続き研究を頑張りたいと思います。

宋 多情

島嶼研分室だより No. 13

令和 3 年 9 月 30 日発行
鹿児島大学
国際島嶼教育研究センター奄美分室
〒894-0026
鹿児島県奄美市名瀬港町 15-1 奄美群島大島紬会館 6 階
TEL: 0997-69-4852　FAX: 0997-69-4853
E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp
http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/

表紙写真：笠利湾を一望
（撮影：2021 年 9 月 18 日、櫛田優花）

ISSN: 2189-793X